

本書は、「うたごえ」運動がもった多様な広がりや現在に伝え、戦後日本の社会・文化像にも新たな息吹を吹き込むことになるだろう。

1955年 日本のうたごえ

現代社会・文化史資料

道場親信・河西秀哉 編・解題

「うたごえ」運動資料集

全六巻 [編集復刻版]

1948年にスタートした、「うたごえ」運動は、関鑑子（せきあきこ）という「カリスマ的」指導者の存在や、労働運動や職場・サークル・地域青年組織への指導によって急速に全国に広がり、1950年代半ばには、戦後日本を代表する文化運動として社会的注目を集めた。

しかしその知名度の高さに反し、運動の具体像・実態を知ることは利用できる関係資料に限られることから非常に困難だった。

1940年代後半（運動初期）から1960年（発展期）までをより詳細に知るための資料を集成、「うたごえ」運動とは何かを明らかにする。



戦後文化像に新たな息吹吹き込む—『「うたごえ」運動資料集』の刊行によせて

渡辺 裕 (わたなべ ひろし/東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学・文化資源学)教授)

皆で声を揃えて歌う合唱という活動は、人間にとって基本的な音楽行為であるばかりでなく、社会における共同体の形成や、その維持、変容といった局面においてもつねに重要な役割を果たしてきた。とりわけ近代社会においては、フランス革命時のシャンソンにはじまり、時には権力の統治手段として、また時にはそれをはねかえす民衆の力を結集させる手立てとして、さまざまに形を変えながら「コミュニティ・ソング」の系譜が作られてきた。

第二次大戦後の日本で一世を風靡した「うたごえ運動」は、その意味で音楽や文化という切り口から日本の近代を考えるための恰好の材料である。しかしそれにもかかわらず、その研究はこれまで十分にはなされてこなかった。特定の政治運動と結びついているイメージが強かったためかもしれないが、同時代の「うたごえ喫茶」に象徴的に示されているように、「うたごえ」という語は、そのような党派的な限定をこえた大きな広がりをもつようになっていったし、サークル文学、記録芸術等々の戦後日本の文化全体の動きとも密接に関わっている。さらにまた、西洋発の「コミュ

ニティ・ソング」の実思想や践が世界の様々な文化と出会うことで形作られてきたグローバル・ヒストリーの流れの中にこの運動を位置づけてみるならば、第二次大戦の敗戦で転機に立たされた日本が、西洋文化との関係をどのように再定義し、自文化の再形成をはかろうとしたかということであらためて考え直すための材料にもなるだろう。

「うたごえ運動」の関連資料は、公共図書館などで所蔵されているものが少なく、なかなか目にする機会がないことが最大の問題であったが、今回、音楽センターの所蔵していた重要資料がまとまって複製されることは大変喜ばしい。とりわけ、今日まで続く全国組織である「日本のうたごえ全国協議会」が設立される以前に刊行されていた『音楽運動』や『うたごえ』などの初期資料が複製されていることは非常に意義深い。それらは「うたごえ」の初期のあり方の中に孕まれていた多様な広がりを垣間見させてくれるものであり、ともすると一面的に括れがちな戦後文化像にも新たな息吹を吹き込んでくれることになるだろう。

これまでの資料的制約を取り払う基本資料として極めて大きな意義

高岡 裕之 (たかおか ひろゆき/関西学院大学文学部文化歴史学科教授)

第二次世界大戦後の日本では、勤労者・市民を基盤とする多様な文化運動が、社会運動と結びつきながら発展を遂げた。

1948年、青年共産同盟にコーラス隊が組織されたことを起点とする「うたごえ」運動もその一つであるが、この運動の際立った特色は、それが単なる合唱運動ではなく、むしろ歌を「武器」とした社会運動たることを目的として展開された点にある。しかし「うたごえ」運動は、レッドパージなど種々の圧迫にもかかわらず、「うたごえは平和の力」をスローガンとして全国に拡大していった。1953年に始まる「日本のうたごえ」祭典は、全国から参加する代表者が数万人にのぼる一大イベントとなり、「うたごえ」運動は、1950年代半ばには、戦後日本を代表する文化運動として社会的注目を集めるまでになる。今日の時点からみれば、まさに驚異的な発展である。

しかしその知名度の高さに反し、「うたごえ」運動の具体像、とりわけ運動の発足から1950年代にかけての実態を知ることは、公共図書館等で閲覧することのできる関係資料が数少ないことから非常に困難であった。その意味で今回、金沢文庫閣の努力

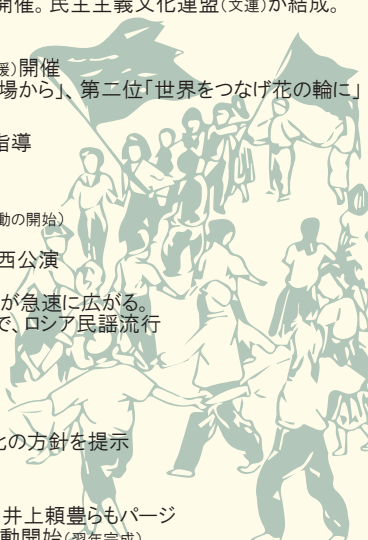
により、1960年頃までの「うたごえ」運動に関する基本資料が『「うたごえ」運動資料集』として複製されることは、これまでの資料的制約を取り払うものとして、極めて大きな意義がある。

今回の『「うたごえ」運動資料集』に収録された資料には、少なくとも三つの特徴がある。第一は、「うたごえ」運動の社会運動的側面に関わるもので、その範囲は内灘闘争・砂川闘争などの反基地運動、原水爆禁止運動から、近江人絹争議など個別の労働争議まで多岐にわたる。第二は、音楽運動としての性格に関わるもので、運動に関与した関鑑子・井上頼豊・芥川也寸志ら音楽家の発言は、戦後の音楽を考える上で重要な位置を占める。第三は、各地の合唱団・活動家らの報告であり、そこで触れられた企業や地域社会の姿は、当時の日本社会の一面に関する社会史的「証言」といえる。

このように豊かな内容をもつ『うたごえ運動資料集』が広く活用されることにより、戦後日本の社会・文化に関する研究が活発化し、「戦後」という時代への認識が深まることを期待したい。

「うたごえ」運動略年表

- 1946年
 - 2月 赤十字本社講堂(東京)で日本青年共産同盟(青共)第1回大会が開催。民主主義文化連盟(文連)が結成。関鑑子は音楽分野担当としてこれに参加
 - 5月 関鑑子が第17回メーデーで歌(「赤旗」「インターナショナル」)を指揮
 - 8月 第1回「働く人々の音楽祭」(日本現代音楽協会主催、民主主義文化連盟後援)開催
 - 11月 新作労働歌委員会結成、公募、入選曲第一位「町から村から工場から」、第二位「世界をつなげ花の輪に」
- 1947年
 - 5月 関鑑子が第18回メーデーで新作労働歌を指揮、NHKからも歌唱指導
 - ・この年、青共中央コーラス隊結成、関鑑子が要請を受け指導
- 1948年
 - 2月 青共中央コーラス隊を発展、青共中央合唱団が創立(「うたごえ」運動の開始)
 - 7月 青共中央音楽院設立、関鑑子が学院長就任
 - 8月 青共中央合唱団が大阪、京都、神戸、奈良、名古屋で第1回関西公演
(この公演がきっかけで大阪に関西合唱団、名古屋に名古屋青年合唱団が設立)
 - ・この年、東京都の職場を中心に「みんなうたごえ会」(合唱サークル)活動が急速に広がる。青共中央合唱団員、これを指導。ソ連映画「シベリア物語」のヒットで、ロシア民謡流行
- 1949年
 - 2月 青共中央合唱団は、民主青年団(民青)中央合唱団と改称
 - 5月 メーデーで「八木節」うたわれる
 - 7月 「民青中央合唱団創立一周年記念大音楽会」が開催
 - 同月 第一回全国合唱団団長会議が開かれ、「うたごえ」運動の全国化の方針を提示
- 1950年
 - メーデー前夜祭に職場合同合唱、500人参加
 - 5月 朝鮮戦争はじまる、GHQ指令によりレッドパージが実行。関鑑子、井上頼豊もパージ
 - ・この年、民青中央合唱団が音楽センター会館建設、資金カンパ活動開始(翌年完成)



- 1951年
 - 6月 民青中央合唱団第8回総会開催、民青からの独立
 - 7月 東京中部・南部「うたごえは平和の力」合唱祭
 - ・この年、映画「どっこい生きていく」(今井正監督)同名主題歌
- 1952年
 - 4月 メーデー前夜祭に1,000人の職場コーラス合同合唱
 - 12月 中央合唱団創立四周年記念「日本のうたごえ」開催
- 1953年
 - 6月 第三回全国合唱団会議が内灘で開催、「平和のうた」
 - 11月 産業別全国うたごえ協議会として初の国鉄のうたごえ「日本のうたごえ祭典」(日比谷公会堂)開催、6,000人参加
 - ・この年、『青年歌集』が「隠れたベストセラー」の異名をとる
- 1954年
 - 3月 総評と「うたごえ」運動が提携。「うたごえ」オルグとピキニ環境で行われた水爆実験で第五福竜丸被災
 - 6月 「原爆許すまじ」創作、原水爆禁止運動、近江絹糸
 - 8月 原水爆禁止国民大会と結合、広島で第一回「国鉄
 - 10月 大分ではじめて「農村のうたごえ」開催
 - 11月 「原爆許すまじ—1954年日本のうたごえ祭典」開催、
- 1955年
 - 4月 「原爆許すまじ—春の大音楽会」開催、交響組曲「青」
 - 社会的事件としてメディアに大きく取り上げられる
 - 7月 第五回世界青年学生平和友好祭(ワルシャワ開催)に「
 - 11月 「1955年日本のうたごえ祭典」開催、50,000人参加
 - 12月 関鑑子の国際レーニン平和賞受賞が決定

第一巻

音楽運動



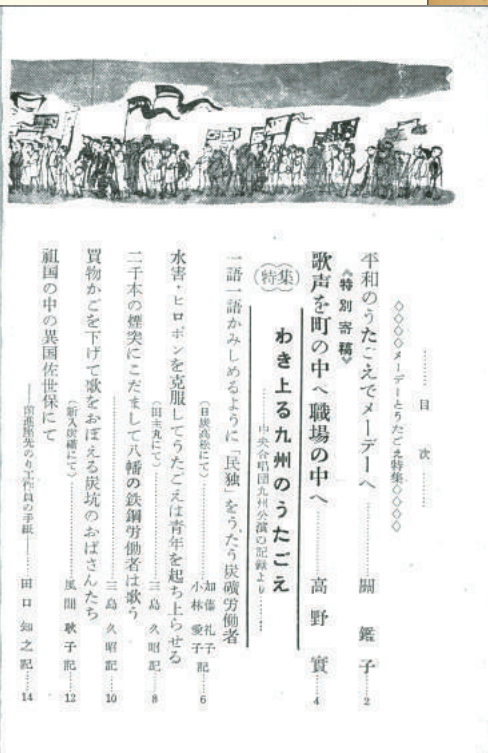
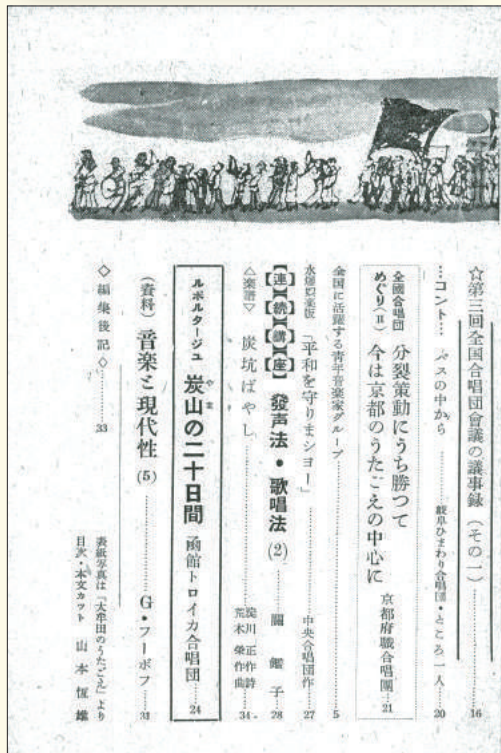
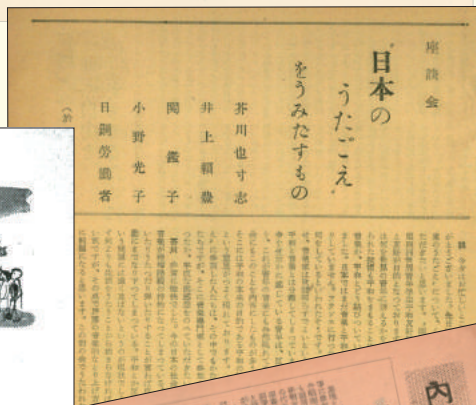
日本のうたごえ運動の基礎的問題
うたごえ運動発展のために
——中央合唱団第三十回総会——
財政活動発展のために

臨時号 1954

『音楽運動』……「うたごえ」運動の総合雑誌。
活動記録、歌われる曲の楽譜、「うたごえ」運動に関する
意見、政治・社会に対するメッセージなど掲載、全国の
「うたごえ」運動の担い手をむすびつないだ。
運動初期の中にはらまれていた多面性を見ることができ、
当時の思想・文化状況の解明に資する。

雑誌・新聞編①

『音楽運動』1952年1号～1955年1号（音楽センター、1952年11月27日～1955年10月25日）
* 解題
道場 親信 「東京南部における創作歌運動」
河西 秀哉 「うたごえ運動とは」



敗戦後～1960年

決定、中央合唱団と改称
題歌を中央合唱団が集団創作
「うたごえをひろめよう」決議、基地反対の創作曲も生まれる
え全国サークル協議会結成。
週刊誌でとる
て各地メーデーに参加、運動に協力。
闘争のなかで急速に普及。
のうたごえ」開催。
25,000人が参加
青年の歌」初演、20,000人が参加し、
うたごえ」運動代表団が参加
oice of Japan" movement (center).

- 1956年
 - 1月 NHK放送討論会「うたごえ運動をいかに考えるか」、関鑑子、諸井三郎ら出演
 - 6月 文部省・自民党が反「うたごえ」運動として、『青年歌集』の文部省版ともいえる『青年合唱曲集』刊行。
 - 10月 砂川基地拡張反対闘争激化の中、「砂川のうた」創作運動すすむ。「沖縄を返せ」のうた九州より全国に
 - 12月 「1956年日本のうたごえ祭典」開催、35,000人参加
- 1957年
 - 4月 第六回世界青年学生平和友好祭(モスクワ)に「うたごえ」運動代表団派遣
 - 8月 モスクワで八・六大集会(60万人参加)開催、「原爆許すまじ」日本代表団全員合唱
 - 12月 「日本のうたごえ祭典」、コンクール形式の合唱発表会が初めて開催
- 1958年
 - 4月 中央合唱団都内各地に分教室設置
 - 6月 平和行進でうたごえ旗全国リレー
 - 10月 警職法粉碎うたごえ行動隊活動
- 1959年
 - 1月 戦争と失業に反対する国民大行進の中で「大行進のうた」広がる
 - 8月 「第一回西日本のうたごえ」(広島)
- 1960年
 - 3月 三池支援「うたごえ」全国統一行動二次、延7,000名参加
 - 6月 三池・安保闘争の中で「がんばろう」の歌広がる
 - 8月 「第二回西日本のうたごえ」(大牟田)
 - 12月 祭典後の全国合唱団会議で中心合唱団の倍加運動を決議

五五年日本のうたごえに向つて
ふるさとの歌を、しあわせの歌を

本資料集内容、三つの特質……

- (一) 「うたごえ」運動の社会運動的側面に関わるもの。範囲は内灘闘争・砂川闘争などの反基地運動、原水爆禁止運動から近江人絹争議など個別の労働争議まで多岐。
- (二) 音楽運動としての性格に関わるもの。運動に関与した関鑑子・井上頼豊・芥川也寸志ら音楽家の発言は、戦後音楽史を考える上で重要な位置を占める。
- (三) 各地の合唱団・活動家らの報告。そこで言及された企業・地域社会の姿は、当時の日本社会に関する社会史的「証言」たりえる。

第二巻

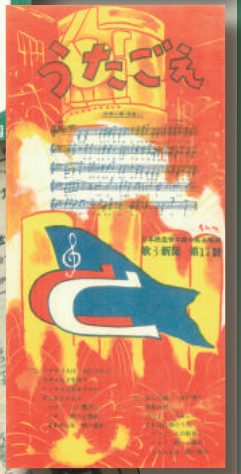
1950年代半ば「うたごえ」人口は、約200万人以上にものぼった。そこには、共産党の文化運動にとどまらない、サークルとしてのつながりを希求し、思想を越えた歌の集団としての「うたごえ」運動を求める参加者の存在があった。

雑誌・新聞編②

『うたごえ新聞』創刊号～121号（30、49、54号欠）（日本のうたごえ実行委員会編、音楽センター発行、1954年12月15日～61年1月1日）

*特別附録資料

『うたごえ』1～20号（日本民主青年団中央合唱団→青年音楽協会、1949年10月30日～50年11月15日）



「うたごえ」運動資料集